

# 一枚の絵葉書から

石井敏夫コレクションより

第68回

# パンパ映画館街

今はまったくと言っていいほどの面影はないが、かつてパンパは仲見世を中心に「宇都宮の浅草」と称される大歓楽街であった。特に仲見世を挟んだ通りの両側には、映画館、演劇場が建ち並び、映画の封切りともなれば、観客が長蛇の列をなした。映画館街は一九六二（昭和三十六）年二月の仲見世撤去後もパンパの象徴として存在。九五（平成七）年に、最後の映画館スカラ座（旧電気館）が閉館するまで多くのファンを魅了し続けた。

「今週の上映開始時間」の告知とともに各館で上映される映画の解説が詳しく紹介されていた。



映画館として記されているのは六館。「富士館」（第二東映）「大映」（旧電気館・大映）「ミヤマ座」（旧宮樹座）「松竹映画劇場」（旧帝國館・松竹）「花屋敷」（旧寿座・東映）「歌舞伎座」（日活）の名前が見える。紹介されている映画から推測するに、五〇年代末期の昭和三十四年ごろの発行。映画全盛期ならではの新聞であった。

パンパに宇都宮最初の映画館が誕生したのは、一九一〇（明治四十三年）のこと。「年表栃木県のあゆみ」（下野新聞社）によれば、「馬場広場に『寿座』（後に花屋敷）開館。宇都宮最初の映画館。入場



電気館改築記念絵葉書。縦帳に宇都宮市相生町、宇都宮電気館とある

料大人八銭、小人四銭ほど」と記されている。寿座を皮切りに、パンパには次々と映画館が開館。一九二九（昭和四）年発行の「大日本職業別明細図」には、「宮樹座」「電気館」「帝國館」「歌舞伎座」をはじめ、パンパの映画興行を一手に担っていた「斎藤興行事務所」が書き込まれている。「（略）店主は斎藤金次郎氏にして一方に斎藤興行部を擁し宮市の歓楽境大馬場を支配せる巨人（略）」とは、「昭和十一年ごろの宇都宮」（夕刊しもつけ社）に紹介された梶金菓子店の一節である。

また、「花屋敷」には小動物園や遊園地が併設され、一日を楽しく遊べる子どもたちの天国だった。静御前にまつわる伝説の鏡が池もこの敷地内にあった。パンパは文字通り浅草六区に引きもとらない映画館街だったといえよう。

のぼりが林立する改築になった電気館と観客たち

